

講談『猿飛佐助』と 今治藩家老 江島家文書展

図録・解説



◆ 愛媛大学地域創成研究センター シンポジウム 講談『猿飛佐助』

日 時 : 10月3日(土) 13:00~15:00

場 所 : 今治地域地場産業振興センター 1階 展示ホール

口 演 : 旭堂 南海(上方講談師)

パネラー : 高橋 圭一(大阪大谷大学)

福田 安典(愛媛大学)

司 会 : 神楽岡 幼子(愛媛大学)

企画参加 : 石塚 真子(愛媛大学)

◆ 愛媛大学図書館 企画展 江島家文書展

日 時 : 10月3日(土) 10:00~17:00

場 所 : 今治地域地場産業振興センター 1階 展示ホール

ギャラリートーク : 15:15~15:45

瀧川 鯉太(落語家)※今治出身

福田 安典(愛媛大学)

<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/EJIMA/>



ご あ い さ つ

地域創成研究センター長 宮崎 幹朗
図 書 館 長 小 淵 港

この度、愛媛大学地域創成研究センターと図書館では、「講談『猿飛佐助』と今治藩家老 江島家文書展」を開催することになりました。

“江島家文書”とは、今治藩の家老職を務めた江島家の資料で、かつての今治の姿を知る一級資料であり、天保年間（1830-1843）の伊予今治城図、江島家系図から今治の行政資料までも含む価値ある文書です。

今回、上方講談師による「講談『猿飛佐助』」とシンポジウム、及び、「江島家文書」から20点を取りあげ、ギャラリートークを開催し、皆様にご紹介させていただきます。

愛媛大学では、地域社会や産業界との連携や交流の推進を図っておりますが、図書館においても地域の開かれた文化拠点としてその役割を果たしていくことが益々重要になってきております。

このシンポジウム及び企画展を期に、郷土今治の歴史と文化に対する理解を深めていただければ幸いです。

本日、ご来場いただきました皆様に心より感謝するとともに、本企画展のために、ご尽力いただきました関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

結びにあたりまして、今後とも本学へより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 21 年 10 月 3 日

関連展示

鈴鹿文庫の講談資料

福田安典（愛媛大学）

愛媛大学鈴鹿文庫は、京都大学で国文学を専攻し、京都大学に奉職し、大谷大学、ノートルダム清心女子大学、神宮皇学館大学教授を歴任した鈴鹿三七氏の旧蔵書である。鈴鹿三七氏は古書学の泰斗として知られ、その蔵書の中でも「鈴鹿本今昔物語」が有名である。

鈴鹿家は京都市の吉田神社の社家として、中世以降卜部（うらべ）神道の伝統を継承してきた。鈴鹿連胤（つらたね）は、近世後期に日本最古の辞書「新撰字鏡」を探求し、これを世に紹介した。連胤とその後裔は、文学関係者と交渉が深く、香川景樹（かがわ・かげき）・小沢蘆庵（おざわ・ろあん）などとも交渉があり、伊予の国学者矢野玄道もしばしば鈴鹿家を訪れている。鈴鹿三七氏は、連胤から四代目。

この吉田神道と関わりの深い講釈師として増穂残口（ましほ・ざんこう）がいる。また、大阪講談師の玉田玉秀斎（たまだ・ぎょくしゅうさい）は、玉田永教（たまだ・ながのり）の神道講釈の系譜に連なるが、その玉田永教が吉田神道を学んだことから、鈴鹿文庫には永教の資料及び講談資料が若干ある。

①菅家世系録（かんげせけいろく）

大本三冊。文化六年（1809）刊。

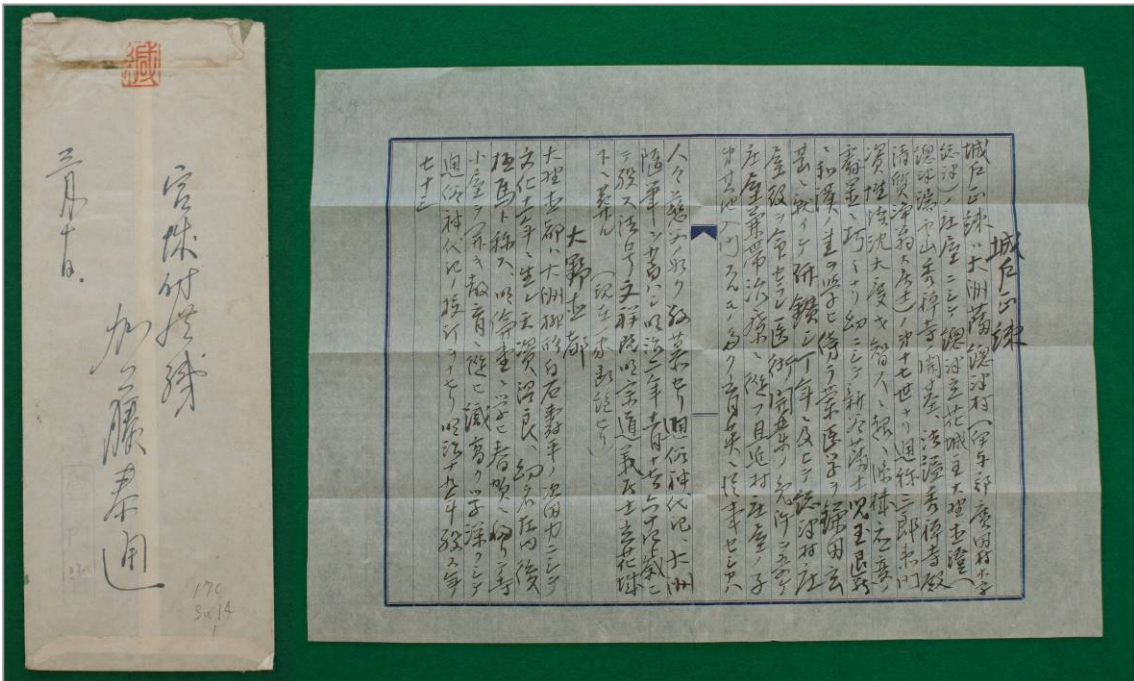
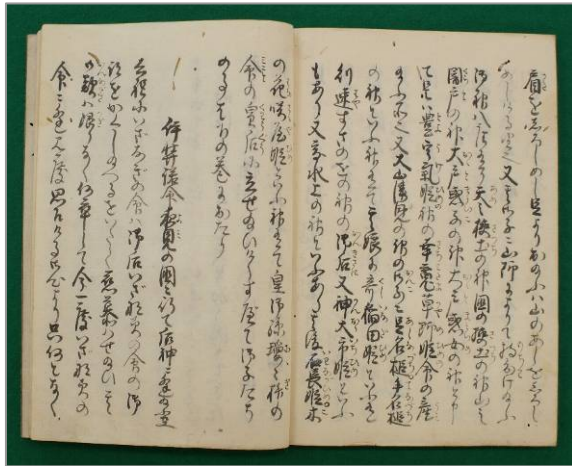
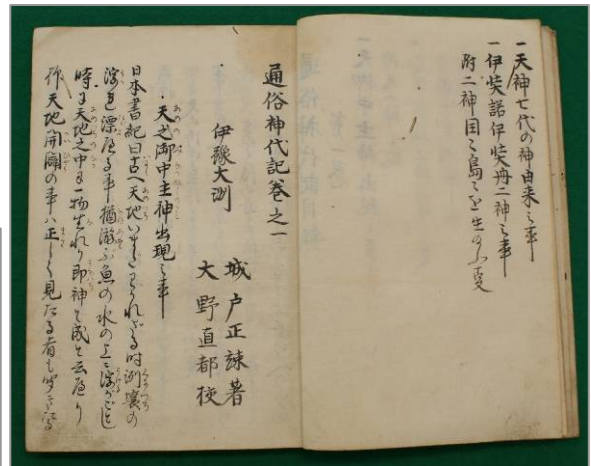
玉田永教著。菅原道真の伝記に関する著述。道真についての伝説もまじえる。



②通俗神代記（つうぞくしんだいき）

半紙本 10巻5冊 万延元年（1860）成立。

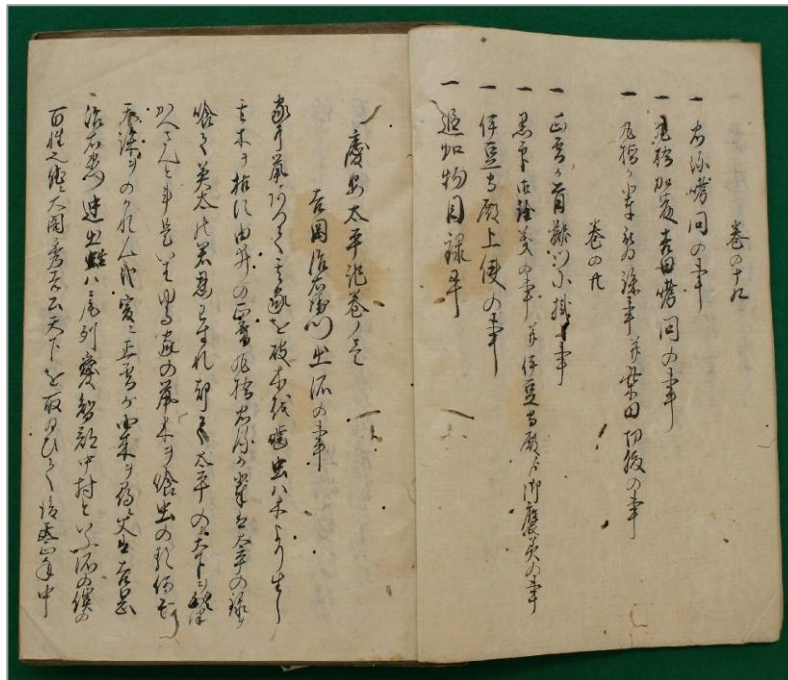
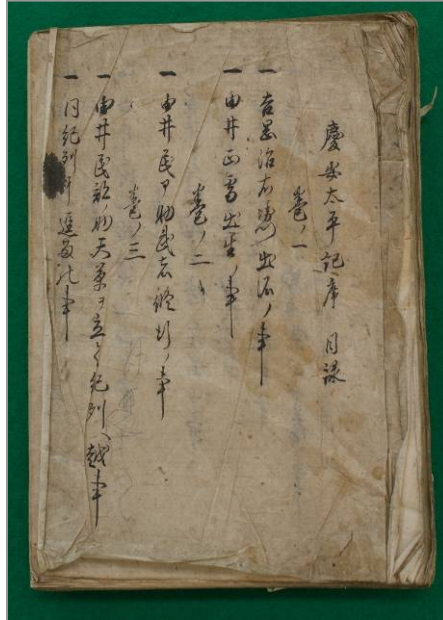
通俗物とは難しい原典を、世俗の耳に入りやすいように和らげたものであるが、後には自由な解釈を加えて発展した。この神代記の通俗物を手がけた人物は大洲の城戸正竊。この人物について鈴鹿三七氏は大洲藩旧藩主嫡裔の加藤泰通（かとう・やすみち）に問い合わせており、その手紙も現存している。



③慶安太平記（けいあんたいへいき）

半紙本 1冊

江戸時代に流行した実録物の中でも、有名なもので諸本も多い。由比正雪を扱ったもの。



2009年 愛媛大学図書館企画展

江島家文書展解説

福田安典（愛媛大学）

◎江島家文書について

江戸時代初期の今治において、というより日本社会の中で、江島為信（えじまためのぶ・1635－1695）ほどダイナミックかつ波瀾万丈な人生を歩んだ人はいないであろう。彼は日向飢肥（おび）の江島為頼の三男として生まれた。ところが明暦元年（1655）に故郷を出奔し、三都を浪々とする。その出奔の理由については定かではないが、十三年の間、諸国を放浪する。その間に小説を書き、『理非鑑』（りひかがみ）『身の鑑』（みのかがみ）という仮名草子作品を残す。このような小説家は、伝も確かではなく、そのままいつしか忘れられて行くはずであるが、為信は寛文八年（1668）に伊予今治藩主松平定房によって馬廻り百石取りの武士として採用される。この採用の経緯もまた不明であるが、きわめて異例のことである。その異例はそれにとどまらず、晩年は五百石取りにまで累進し、今治藩の国家老にまで出世した。江島為信とはそのような人物である。

また、為信は江戸留守居役の時に山水という号で俳諧に遊び、折しも談林俳諧が流行する中で、その重要な位置に立ち、井原西鶴などとも交遊があった。そのため、今治の為信のもとに大阪の俳人が訪問することもあったという。

江島家文書とは、その為信を中興の祖とする今治藩江島家に伝来した文書である。この文書は明治までは今治にあって、時には展示されることがあったらしいが、その後は今治から関西に移された。愛媛大学図書館では平成13年のデジタルコンテンツ研究会の活動において同資料と出会い、ご遺族の温かなご厚意により寄託を受けて、整理と研究に着手している。

また、今治市との間の共同研究がなされ、平成15年には日本国立大学図書館協会賞を受賞している。

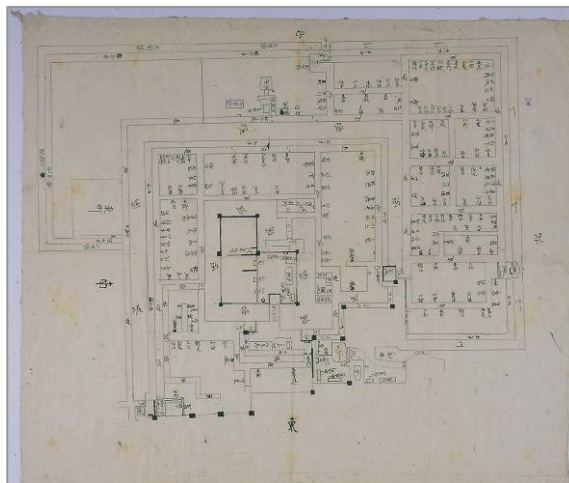
その江島家文書の「今治へのお里帰り」が本年度の企画である。

◎展示解説

④今治城下屋敷見取り図

1紙 47.5糎×41.4糎

裏に「為親」の印があり、江島家で作成したと思われる。江戸時代の今治城下の様子がうかがわれる。



⑤天保年間（1830-1843）の伊予今治城図（複製）

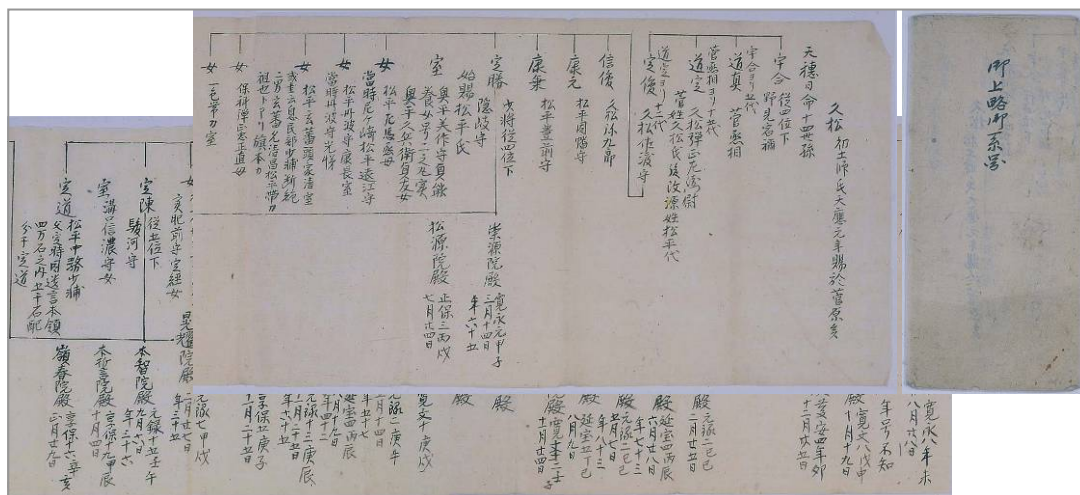
1紙 39.4糎×54.0糎



⑥久松家系図

1紙 16.5糎×157.4糎

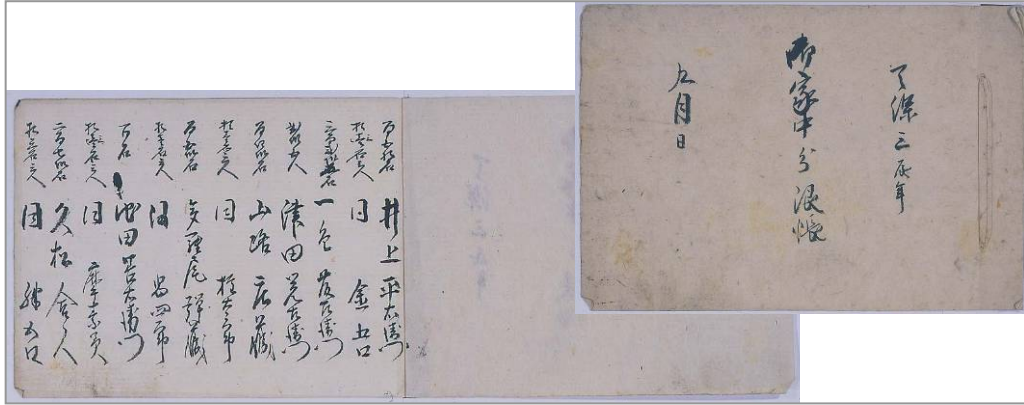
江島家文書には今治城主久松家の系図が数種収められている。展示品はその一つ。包み紙があつて「御上略系図」とある。内容は「久松家系図」「戒名享年」「今治之城」「同間敷」「明細積」「今治地方」「江戸廻町上屋敷」「品川下屋敷」「深川屋敷」。



⑦天保三年（1832）御家中分限帳

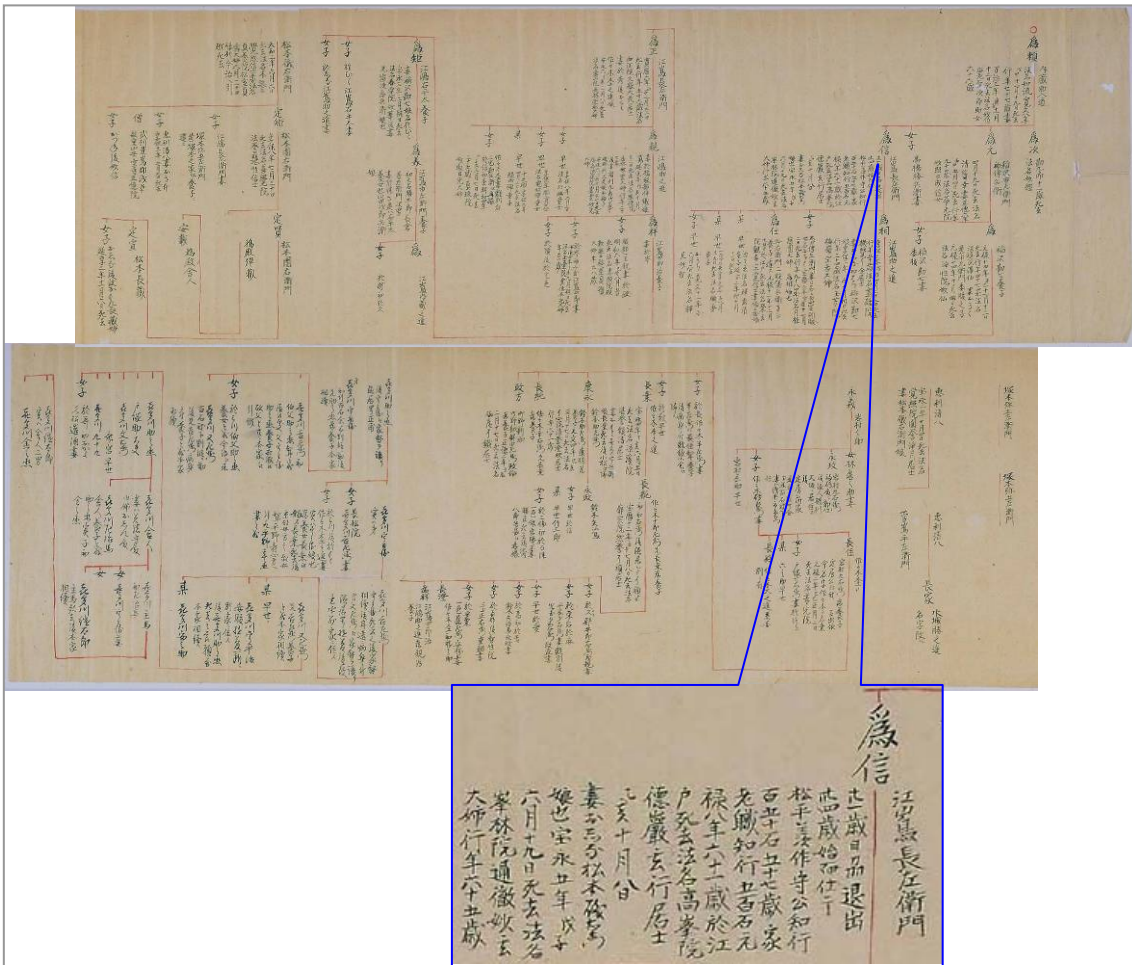
写本1冊。横本。18丁。

表紙に「天保三辰年 御家中分限帳」とあって、天保三年の分限帳（ぶげんちょう）。分限帳とは、江戸時代に武士の身分、役職、知行などを記した帳簿のこと。すなわち天保三年における今治藩家中のいわば職員録である。



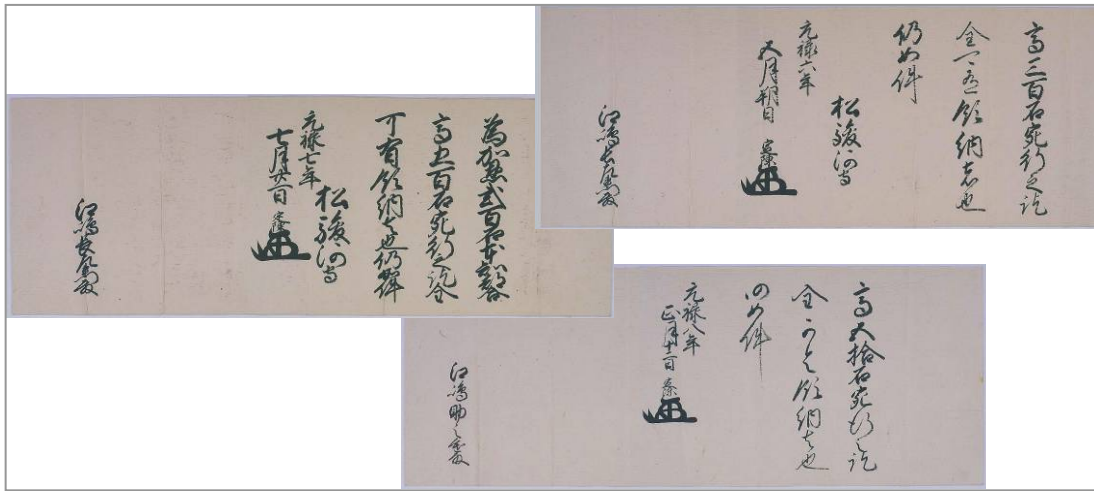
⑧江島家系図

1紙 24.5糎×155.4糎
為信の父為頼から為祥までの系図。



⑨歴代藩主から江島家への知行書類

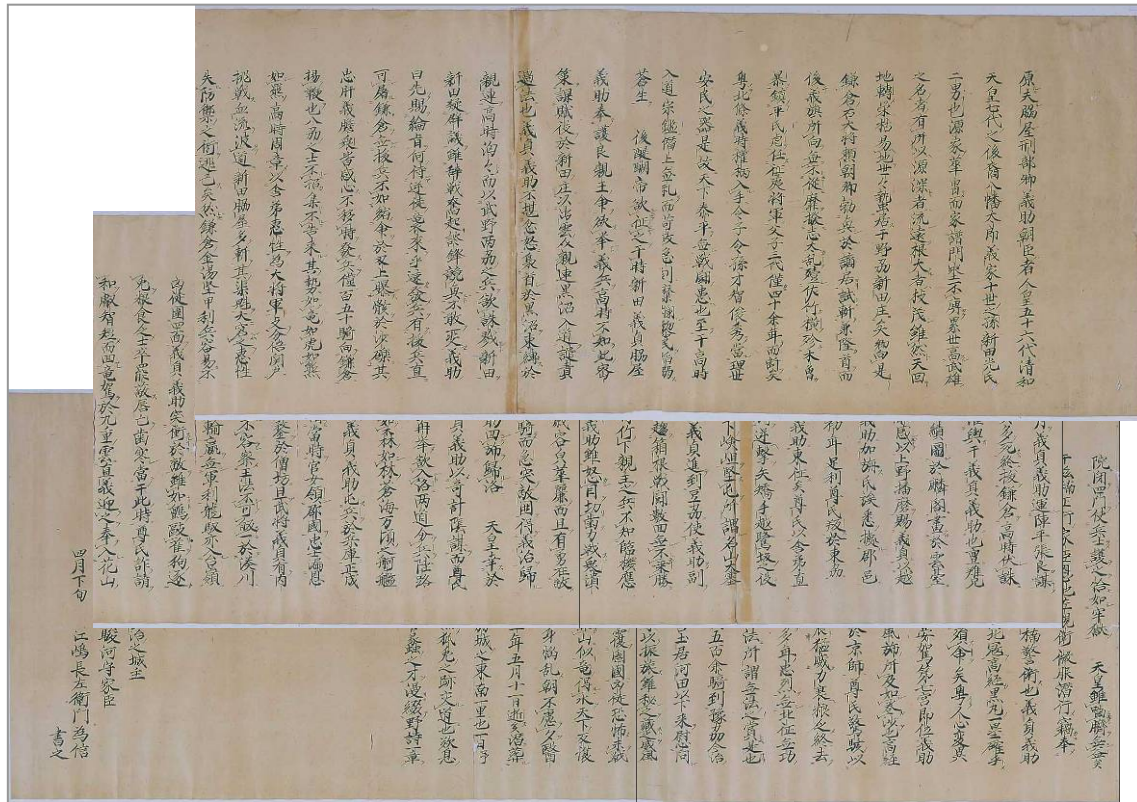
歴代藩主から江島家当主へ、知行高を記して下賜した書類。花押とともに歴代藩主の署名がある。



⑩脇屋義助卿縁起 (わきやよしすけきょうえんぎ)

1巻。元禄2年(1689)成立。30.3 糶×241.6 糶

為信の自筆はほとんど残されていない中で、為信自筆をうかがわせる資料。南朝の忠臣新田義貞の弟・脇屋義助は伊予に逃れたという。また、四国には新田伝説がある。今治では国分寺脇に義助の墓があり、寛文9年(1669)に修復されている。『今夜夜話』等によれば、元禄2年、為信は玉垣、石灯籠を奉納し、国分寺に脇屋卿縁起と漢詩一卷を奉納したとされる。



⑪山水発句拓本（さんすいほくたくほん）

拓本1紙 24.6糎×31.8糎

為信は江戸留守居役の時に山水という号で談林俳諧で活躍し、井原西鶴などとも交遊があった。当資料は山水の自筆として貴重ながら、もととなった資料は不明である。

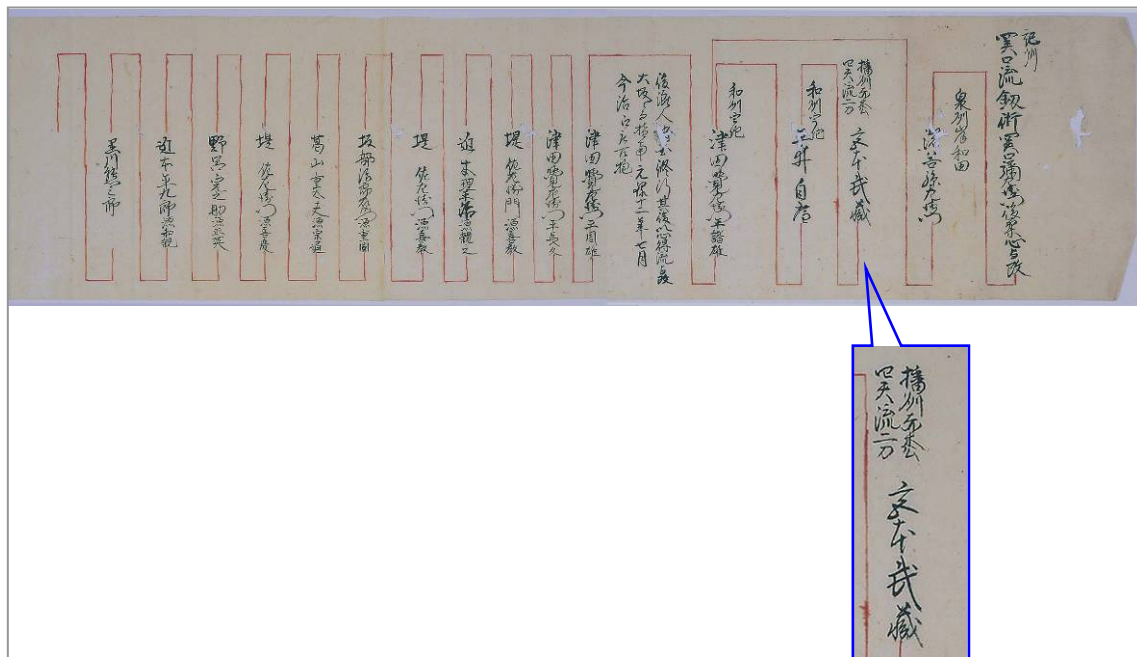
不二は磯西行か眼高／＼目



⑫四天流剣術伝書（してんこうりゅうけんじゅつでんしょ）

1紙。15.7糎×74.2糎

包み紙には「江嶋助之進」とある。四天流の剣術伝書で、「四天流二刀」として播州赤松の「宮本武蔵」の名が見える。今治藩はこの流派の津田覚左衛門を元禄12年（1699）7月に召し抱えている。



⑬いろはたとへ

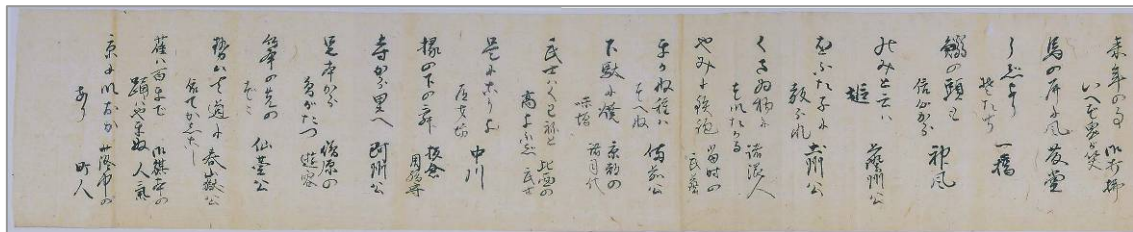
1紙 14.9 糶×155.5 糶

幕末、今治藩は微妙な立場を取っていた。その時に江島家が収集、もしくはその周辺で作成されたと思われる戯書。いろはカルタ風に当時の時代風潮や人物を諷刺したもの。



いろはたとへ

一寸先はやみのよ 此頃の御時勢
 論語読の論語しらず 林大学
 針の穴から天を見る 嶋津三郎
 二階から目薬 鍋嶋公
 仏の面も三度 攘夷延引之願
 へたの長だんぎ 江戸
 豆腐にかすがい 公武の御縁組
 地獄の里も金次第 九條殿
 りんげんあせの如し 攘夷勅命
 糠に釘 御老中
 鬼も十八 薩州 長州 家中
 笑ふ門には福来る 近衛
 蛙のつらに水 異国人
 よめとふめ傘の内 備前公
 立板に水 薩州公
 れん木で腹を切 久世大和守
 袖の振合も多少の縁 紀州公
 月夜に釜をぬく 長州公
 猫に小判 佐竹
 なす時のえんま顔 公家公



来年の事いへば鬼が笑 御打払
 馬の耳に風 藤堂
 うじよりそたち 一橋
 鯛の頭も信心から 神風
 のみと云ば槌 薩州公
 をふた子に教られ 土州公
 くさる物にはいたかる 諸浪人
 やみに鉄鉋 当時の武芸
 まかぬ種ははへぬ 備前公
 下駄に焼味噌 京都の諸司代
 武士はくはねど高よふし 比面の武士
 是にこりよ道才坊 中川
 椽の下の舞 板倉周防守
 寺から里へ 阿州公
 足本から鳥がたつ 嶋原の遊客
 竿の先のすゞ 仙台公
 せいは道に依てかしこし 春嶽公
 雀は百まで踊はやまぬ 御旗本の人気
 京にいなかなり 落中の町人

⑭天保四年（1833）正月二十二日婚姻式の次第

1紙 28. 3糎×382. 2糎

天保4年の婚姻の際の次第と献立。上部の破れから、壁に貼っていたものと思われる。郷土料理資料としても貴重で、愛媛大学図書館のウェブサイトにレシピが公開されている。
 (http://www.lib.ehime-u.ac.jp/EJIMA/html/05/ryori/ryori.htm)



正月廿二日婚姻式
 合盃之次第
 熨斗鮑 木具小角 鋪紙 三方
 引渡初献 木具昆布 勝くり
 二献 木具 花かつお
 小血田作り 結蕨 結昆布
 雑煮 餅 大こん
 小血数子 子持ひれ
 吸物 三献 木具 調子
 包形 三土器 子持ひれ
 包形 長柄銚子
 色直服紗料理 鋪紙 三方
 手掛熨斗 せり 千牛券 椎たけいも 小つみ入
 平皿 香の物高盛飯 調作り身 せふか うち身魚 口ふきのとふ
 引酒 掛合 吸物 三土器 敷の子 巻鯛 巻昆布
 提子 長柄銚子 三土器 鋪紙 三方
 家内対面の節 手掛熨斗 鮑ひれ 鋪紙 三方
 吸物 三土器 巻鯛 敷の子
 提子 長柄銚子 敷の子
 長柄銚子 提子



舅入りの節 鋪紙 三方
 長熨斗 花ほうと 鋪紙 三方
 吸物 巻するめ 敷の子
 三土器 三献
 提子 長柄銚子
 夜分 濃醬 つけみ入 大こん 焼もふ 牛焼飯 茶漬飯
 香の物 板はんへい 焼鳥ささい 小車えいひ 飯たこ 玉子 河草いも 九ん母 年にんしん 巻鯛のとふ
 大鉢着 松竹梅
 千秋万歳



家老家の婚礼料理（再現）

2009年10月

発行：愛媛大学地域創成研究センター、愛媛大学図書館

